

物語読む視点示す フェミニズム批評

よみがえる浦島伝説

恋人たちのゆくえ

坂田千鶴子著（新曜社・二〇〇〇円）

八世紀から現代まで、様々な形で

伝えられている「浦島伝説」の流れをたどるといふ書物は、今までに何冊も書かれているが、本書の特長は、それをフェミニズム批評の立場から論じるといふ点にあるだろう。

そして、その試みは、ことに浦島伝説を論じる場合にとても有効ではないかと思つた。

なぜなら、起源に置かれる女と男との恋の物語が、恋を脱落させ、恩返しモチーフを加え、近代の教科書や絵本へと展開してゆくという歴史的な変遷の中に、ジェンダー的な視



点を幾重にも浮かび上がらせることができるからである。

その浦島伝説の始発に位置する『丹後国風土記』逸文に「最高の男への恋に生きた娘」を見出し、「恋人伝説だった本来の浦島子伝説の復権」を主張しようとしたのが本書である。ジェンダー・バイアスのかか

つた評者は、「女の恋」といふモチーフに「日本

古来の大らかな男女の関

係」をみるのは大らかすぎるよと嫌

みを言いつつ、著者の浦島論に共感

する部分が多かった。ことに、森鷗

外の戯曲『玉篋両浦嶋』の「おこと

は自然、われは人」といふ男女観に

「明治国家の帝国主義的体質と一体

化した、独善的で傲慢な家父長・浦

島太郎」を見出すことで『舞姫』の

本質を射抜いているのは見事だし、

近現代の浦島絵本に対する批判も大

いに納得させられた。

起源の浦島を、伝説（民間伝承）

ではなく物語（恋愛小説）だったと

みる評者にとって、風土記の結末

評者・三浦 佑之（千葉大学教授・国文学）

の、箱から湧き出た雲を「かぐわしい娘の体」と読んでよいかどうか、この物語にとってもっとも重要な、地上と異界との時間差についての言及がほとんどなされていないのはなぜかなど、疑問や反論がないわけではない。しかし、それ以上に貴重なのは、本書が、物語を読む視点とは何かについて考えさせてくれることだと思ふ。その意味でも、巻末に学生たちの創作した浦島の絵本が置かれているのは巧みな構成である。

◇

さかた・ちづこ 一九四二年生まれ。東邦学園短期大学教授。共著に『女が読む日本近代文学』『男性作家を読む』など。